



【書評】尾原昭夫編著『賢治童話の歌をうたう』—  
宮澤賢治の音楽風景II—風詠社刊

A5判 二五五ページ 定価二、二〇〇円

酒井董美 ただよみ



宮澤賢治

年、出雲市斐川町生まれの詩人・童話作家、宮澤賢治  
わが国のわらべ歌、児童風俗研究の第一人者として知  
られている。

本書は岩手県生まれの詩人・童話作家、宮澤賢治  
(八六〇明治一九二九〇昭和三〇)の作品の中の歌に焦点を絞  
つている。本書には全部で九十一曲の詞章が楽譜と共に  
掲載されているが、その中で賢治自身の作曲による  
のが十四曲。わらべ歌や外国の作曲家などの曲が十六  
曲見られる。原作には詞章だけ出ているものも多い。  
著者は丹念に作品に当たり、詩型を分析している。  
すなわち。短歌形式(五七五七七)、江戸時代に始  
まった近世民謡調(七七七五)、明治時代の新体詩型  
(七七五とか五七七)のほか、わらべ歌、神楽、鹿踊り、  
剣舞、平安時代の今様など、いかに多彩な音楽が使わ  
れているかを明らかにしている。また、本書の特色は、  
楽譜の欠けている詞章だけの歌は賢治ならば多分この  
ような曲にするだろうと、著者が賢治に代わって作曲  
した楽譜も六十三曲準備されている点にある。

取り上げている作品名を順にいっつか挙げておく。  
双子の星、蜘蛛となめくじと狸、かしわばやし夜の夜、  
月夜のでんしんばしら、鹿踊りのはじまり、このほか十  
七作品が紹介されている。  
そしてそれぞれに、「本文と楽譜」、「お話しと歌に  
ついて」と続くが、ここには「登場人物」「あらすじ」と要  
点「わかりにくい言葉」と読者の理解が容易になるよ  
うな配慮がなされているのである。

著者は若い頃から宮澤賢治に傾倒し、賢治の生地  
岩手県(も何回も研鑽に出かけている。島根大学教育  
学部特設音楽科(音楽高校課程)で音楽理論と作曲  
を専攻しているだけに、まさにこの面での研究者とし  
ては「鬼に金棒」と形容して差し支えないように筆者  
には思われる。前回の書評にも書いた言葉と重ねて記  
し、今回の結びとしたい。

尾原昭夫氏の執念で完成した本書は、今後、宮澤  
賢治研究の必携書となることは間違いない。(元島根  
大学法文学部教授)